The social welfare in OSAKA

大阪の社会福祉

2024年7月
830

社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会 https://www.osaka-sishakyo.jp

少年刑務所での取組みから大人たちの役割を話し合う

6面
生野で生活することを考える
困った子は困っている子

HB

近所の一人暮らしのおばあさんが、誰も採る人がいないから、木に登って食べていいよと、遊びに来ていた孫に声をかけてくれたのが、もう数年前になる▼その時もらったビワの実を食べて、庭に蒔いた種が芽を出して、1メートルほどの高さになった。そして、今年初めて6個の実がなった▼サクランボほどの大きさの実だが、もっと大きくなるだろうとそのままにしていたら、雨が降った翌日、実が一つ落ちてしまった。もう限界だと。残りの5つを収穫▼サクランボは一日収穫時を逃したら、ヒヨドリに全部取られてしまうが、ビワはそんなことはなかった。小さな実だが、熟したものと同じようにスルっと皮が剥けて、食べてみると、店に売っているものよりずっと甘いほんもののビワだった▼近所のおばあさんの親切が、まさに結実して、おいしい実になった。来年はもっと大きな実がたくさん収穫できるに違いない。幼児だった孫もビワの実と同様に成長し、中学生になった。おばあさんいつまでもお元気でと願うと同時に、来年のビワが本当に楽しみになった。（石）

「大阪の社会福祉」は共同募金助成金を活用して発行しています。

特集

活動者の広げ方のススメ5

地域との関わりを知ってもらうために、まずは活動者と顔を合わせる

本記事では、新たな担い手発掘をめざして、市内各区・地域の工夫をこらした取組みを紹介します。（「活動者の広げ方のススメ」1～4は令和6年1～4月号に掲載）

住民と地域活動者が顔を合わせる機会をつくる

淀川区新東三国地域は、JR東淀川駅・新大阪駅、Osaka Metro東三国駅に近接しています。今回は、同地域の社会福祉協議会の会長を務める辻本啓二さん、地域活動協議会・連合振興町会の会長を務める仲川勝さんに、実施しているさまざまなイベント、なかでも小・中学校と連携した取組みを通して、新しい地域活動者を増やしていくために意識していること、工夫している点、活動を始めたきっかけなどをお聞きしました！

▲仲川会長（左）、辻本会長（右）

新東三国地域での取組みについて教えてください。

辻本さん　担い手を増やすためには、新東三国地域の活動を知ってもらうことや地域住民と一緒に活動することが必要だと考え、クリーンウォークや地域全体での大運動会、毎年土曜授業の一環として実施している防災訓練、夏祭り等をおこなっています。クリーンウォークは、みんなで町をきれいにするイベントで、活動しながら話すことを通して町の魅力の新たな発見ができる機会として、年3回程度開催しています。また、さまざまなイベントで、地域の中学生で構成しているジュニアリーダーにも担ってもらい、一緒に活動しています。そうすることで、未来の担い手育成や地域、町会の人と顔を合わせる機会にもなっています。最近の防災訓練では、町会の大人とこどもが一緒に一時避難場所から新東三国小学校へ避難してくるという内容でおこないました。学校の担任の先生とも出会える機会になりました。

仲川さん　辻本会長のお話に加えて、小学6年生が卒業する際に「卒業生へのお話」として、地域の組織・団体・役割等を説明し、災害時には周りの助けが必要となること、だからこそ、どこにどのような人が住んでいるか知っておくことが重要で、地域との関わりを知ってほしいということを伝えています。そして、どのような地域活動が実施されているかを知ってもらい、1年を通じて実は地域と関わっていること、中学生になっても、大人になっても、継続して参加してほしいことも伝えています。また、フードロスマルシェ（販売期限や賞味期限の理由によって食べられるのに廃棄される予定の食品を販売し、独居の方等が外に出て買い物を楽しんでもらうイベント）も市営住宅やアーベイン（UR賃貸住宅）等のいろいろな場所で実施し、外出の機会にするとともに、相談コーナーやこどもコーナー等で参加した方とつながれる機会をつくっています。ほかにもはたちのつどいや凧あげ大会等さまざまな企画を通して参加者から活動へとつなげていけるよう取り組んでいます。

▲フードロスマルシェの様子

▲フードロスマルシェでのマリオネットショー

地域活動者を増やしていくために意識していることはありますか。

辻本さん　地域役員の皆さんは平均年齢が比較的若いこともあり、柔軟に企画してもらえるよう「こんなことをしたい」という声があれば、「まずは1回やってみよう！」の精神でやってみてもらっています。不評で難しければやめることも検討しますが、まずはやってみないことには何もわからないため、取り入れるようにしています。例えば、一人から「こども食堂をしたい」と声があがり、平成30年7月頃からやってみることとなりました。月1回継続して実施しており、今では宿題も見る等、居場所づくりになっています。

仲川さん　時間がある時に参加してもらい、少しずつ関わってもらえるようにとの思いから大運動会等の何かイベントの際は、ジュニアリーダーは自由参加にしています。また、「大変そうだから手伝おうか」という気持ちを自然ともってもらえるよう意識しています。そのほかには、やはり顔を合わせる機会が必要と思うので、小学校のPTAと話し合って、コロナ禍の時期から小学生の登下校を見守る「新東三国見守り隊」を再編・増強しました。こどもたちを含め、多くの方と顔を合わせ

る機会をつくっています。

活動を始めたきっかけについて教えてください。

辻本さん　子ども会をしていて、そこから知っている人と一緒に活動することとなり、今に至ります。活動が継続できているのは、こどもが好きということが一番ですかね。子ども会をしていた時やジュニアリーダー、はたちの集い、そのほかのいろいろな行事等で関わったこどもが「おっちゃん」と言って戻ってきてくれることがすごくうれしいです。成長した姿も見られるので、その時がやりがいを感じる一つでもあります。いくつになっても声をかけてもらえることはうれしいですね。

仲川さん　淀川区ではありませんが、自分がこどもの頃住んでいたところで、地域の方にお世話になったので、恩返ししたいと思っていました。バリバリ仕事していた時は重要な役割をなかなかできませんでしたが、できることはどんどんしていきたいと思いながら、今活動しています。大変な時もありますが、みんなで分け合いながら、飲み仲間もでき、地域が好きなので、楽しく活動しています。

今後の展望について教えてください。

辻本さん　フードロスマルシェでは、毎回変化をつけられるよう考え、開催する場所を増やすことやブースの内容等、さまざまなことを模索しており、よりよい活動にしていきたいです。また、地域の行事では、カタチを変えてなら実施できるものは少しカタチを変えるなど、工夫しながら復活させていきたいと思っています。担い手についても、活動のなかで次の担い手を探しつつ、引き続き、担い手づくりにつながる取組みをしていきたいと思います。

仲川さん　賛同して参加してくれる人を増やすにはどうしたらいいのかを模索して、探していきたいと思っています。地域の活動では、他の団体とも横でつながり、連携して活動をしていくことが大切ですので、今後も一緒に仲良く協力し合って取り組んでいきたいと思います。

▲新東三国地域役員の皆さん

区社協へメッセージをお願いします。

辻本さん　会議やフードロスマルシェ等でいつもありがとうございます。持ちつ持たれつで、これからも話し合いながら、いろいろな活動でよろしくお願いします。

仲川さん　地域の高齢者等で気になる方がいれば、すぐ動いてくれ、対応が早くて助かっています。防災訓練等さまざまな機会でも、今後もよろしくお願いします。

▲10歳若返りダンス教室の様子

▲こども食堂の様子

活動者を広げていくためのポイント

地域と関わってもらうために、まずは住民と活動者が顔を合わせる機会をつくる

- ●地域について知ってもらうために、活動を話せる機会をつくる。
- ●防災訓練等で町会の大人とこどもが一緒に訓練することで、出会えるきっかけとする。

まずはやってみてもらう精神で柔軟に企画できる環境づくり

- ●まず１回やってみないことには、何もわからないと考え、提案しやすい雰囲気をつくる。
- ●新しいことも受け入れることで、「こんなことしたい」と次からも企画してみようという環境をつくる。

新東三国地域の主な活動（一部）

●高齢者食事サービス　●社協夏祭り盆踊り大会
●家族花火大会　●防災キャンプ　●10歳若返りダンス教室
●大運動会　●敬老事業　●フードロスマルシェ
●防災訓練　●子育てサロン　●クリーンウォーク

「大阪の社会福祉」は共同募金助成金を活用して発行しています。

被災者の思いを一心に！5
七尾市災害ボランティアセンターへの継続した運営支援

令和6年 能登半島地震

1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」で被害を受けた石川県内の市町村社協では被災された方々が元の生活を一日でも早く取り戻せるよう、災害ボランティアセンター（以下、災害VC）を開設しています。被災者・被災地の力になりたいという思いを持ったボランティアが、多数駆けつけており、被災者に寄り添いながら活動を展開しています。

能登半島地震の被害状況で、現在把握している内容としては人的被害1，586名、住宅被害では125，976棟（令和6年6月25日消防庁情報）となっています。

大阪市・区社協では石川県七尾市へ2月17日から6月末まで、約4か月半に渡り、近畿ブロックの社協とともに七尾市災害VCに職員を派遣し、現地の社協職員とともに災害VCを運営し、被災者のニーズに寄り添いながら支援してきました。職員派遣は6月末で終了し、7月以降は地元主体で運営されることとなりました。

今回は第26~31クール、33クールとして派遣した職員が現地での活動で感じたことを掲載します（過去の掲載では令和6年3・4・5・6月号を参照）

▲第28クールから29クールの職員へ電話する際のポイントや現地調査の調査書から判断の仕方等を引継ぎ

第26クール：5月3日~9日
此花区社会福祉協議会
第1層生活支援
コーディネーター
久保 奈津未

災害VCを職員・ボランティア等ワンチームで運営する

派遣期間中は、長期でボランティア活動をおこなう方も多く、慣れからの事故やグループ内での音信不通、廃棄できない家財などを一度預かるも依頼者に返却しなければならない等のトラブルが多発しました。私はマッチング担当でしたが、地域に出る機会が少なく、現地の様子が見えにくいため、ボランティアからの報告は道路状況や依頼者の状況等を知ることができる貴重な情報源でした。災害VCは、状況が日々変化するなかで最新の情報を統一して認識できているかが重要であり、携わる職員、ボランティアがワンチームで運営することが必要と改めて感じるとともに、ボランティアの熱い思いや経験値などを支援につなげる環境を整備することが安全な運営につながると感じました。

熱い気持ちで活動するボランティアの力の偉大さ

ボランティアの方が持つ力の偉大さを実感しました。身体が不自由な独居高齢者宅で活動をおこなったボランティアの方から「ボランティア活動は終了しても今後の生活が心配。地域包括支援センターにつないでもらえないか」といったご相談を受けたり、遠方から来られて「石川のためにボランティアに来て応援していることを地元の方は喜んでくれている、それがボランティアの力の源」と話す方がいたりと、被災された方に寄り添い、熱い気持ちで復興を応援するボランティアの方がいてこその社協の災害支援だと感じました。職員としてその思いをボランティア活動につなげ、現地で活動をおこなうボランティアの方だからこそわかる情報を聞ける、関係づくりも重要だと学びました。

第27クール：5月7日~13日
阿倍野区社会福祉協議会
包括支援担当
愛須 美卯

第28クール：5月11日~17日
港区社会福祉協議会
地域支援担当
岡田 唯奈

「心は熱く、頭は冷静に」現場で求められる即座の判断能力とチーム連携

ボランティア活動のアポイント電話が、つながらなかった（以下、不通）ケースのなかで4月下旬から不通が続いて記録されていたケースが気になりました。ケースの詳細を読み込むと「耳が遠いため、電話に出ることができない可能性有」との記載を発見し、この方に電話をかけ続けるだけでいいのか疑問を抱きました。リーダーへ相談したうえで、基本的にアポイントは電話であるが、このケースでは現地調査班に、対応をお願いすることとなり、訪問により活動日程を確定することができました。私だけではこの結果に決して至らなかったと思います。災害VCで業務内容を遂行するだけでなく、クールのメンバーと相談し、臨機応変に対応する大切さを感じたケースでした。

マッチング時の葛藤から災害VC運営を考える

当クールでは大型の災害廃棄物や数百を超えるブロック塀の回収、引っ越しのニーズが多くありました。危険が伴う作業のため、ボランティアに任せていいのかとマッチング時に葛藤したのを覚えています。平時のボランティアセンターと異なり、災害VCは被災者のために開設されます。しかし、ボランティアなしでは災害VCは運営できません。被災者に寄り添いながら、全国から来てくださるボランティアにも感謝して誠実に対応し、災害VCを一緒に作り上げていくことが大切だと感じました。

第29クール：5月15日～21日
此花区社会福祉協議会
地域支援担当
野張 沙希

第30クール：5月19日～25日
西成区社会福祉協議会
地域支援担当
橋口 風伍

社協の信頼度が問われている

私はクールリーダーを担当しました。センター運営のコーディネーターであり、各担当の進捗管理や、七尾市社協・七尾市との調整を担いました。住民が災害VCに依頼すると、電話受付、訪問による調査、日程調整、ボランティア対応へと進みますが、基本的には外部支援者による対応になります。つまり現地を知らない方に依頼することになります。その時それまで積みあげてきた社協の信頼度が問われているのではないでしょうか。災害への備えだけでなく、平時からの事業推進や、それを通じた他との関わりの重要性を再認識しました。

ボランティアは人手ではなく、思いを持った活動者

当クールからトイレ掃除を資材班の担当する職員ではなく、早く帰って来たボランティアにお願いすることとなりました。引き受けてくださるか不安でしたが「みんなでやった方があっという間に終わるよ」とボランティアから他のボランティアに声かけがあり、一人でこなそうとせず、ボランティアとともに運営していく重要性に気づかされました。また、リーダーから「引っ越しや廃棄の案件が多いこともあり、ボランティアが引っ越し業者や廃棄業者のように受け止められる場面がある。ボランティアは『人手』ではなく、それぞれ思いを持って参加されたボランティア活動者である」と話がありました。活動者への接し方や伝え方を考え直すきっかけとなりました。

第31クール：5月23日～29日
浪速区社会福祉協議会
見守り支援ネットワーカー管理者
三木 香澄

第33クール：5月31日～6月6日
東淀川区社会福祉協議会
見守り支援ネットワーカー管理者
谷口 文香

被災地支援に地元の力が必要不可欠

地元ボランティアの方々が、多い日には100枚以上あるビブスを、自宅で数回に分けて毎日洗濯してくださっていました。「皆さんのおかげで災害ボランティアの方に毎日清潔なビブスを渡せています」と感謝を伝えると「遠くからボランティアが来てくれて本当に助かっている。自分はこれくらいしかできないけどね。ちょっとでも助けになれば嬉しいわ」と話してくださいました。災害VCでは、外部からのボランティア対応に追われることが多々ありましたが、地元住民の存在と、その力も災害VCの運営には欠かせないと気付かされた瞬間でした。そして、被災地がこれまで持っていた力を活かす大切さを再認識できたとともに、その力を途絶えさせない関わりが社協に求められる役割なのだと感じました。

▲大阪市社協HP
被災地支援情報

令和6年 能登半島地震災害義援金募集

みなさまのあたたかいご支援、ご協力をお願いいたします。

〈受付期間〉
令和6年12月27日(金)まで

〈銀行口座〉
りそな銀行 上六支店（普）6804741

〈名義〉
大阪市社協 義援金口
（オオサカシシャキョウ ギエンキングチ）

※詳細については
大阪市社協 総務課 06-6765-5601まで

▲グループ説明で依頼内容を確認している様子（第30クール）

「大阪の社会福祉」は共同募金助成金を活用して発行しています。

生野区

生野で生活することを考える 困った子は困っている子

信頼できる大人との出会い

6月1日午後1時～3時30分に、リゲッタIKUNOホールで「困った子は困っている子～奈良少年刑務所 絵本と詩の教室～」が開催され、約80人の参加がありました。この取組みは、生野区社協・見守り相談室の主催で、罪を犯した少年たちへの関わりを続けてきた寮美千子（りょうみちこ）さんの講演を聞き、地元の企業や飲食店、地域生活定着支援センターからのパネリストを迎え、非行や犯罪を犯した人たちも含めて、生野区でともに生活していくことを考えるイベントとして企画されました。

企画した区社協見守り相談室の職員は「生野区は課題最先端地域と言われます。しかしその課題を解決できるエネルギーと、誰をも包含できる地域であると思っています。こどもも大人も、誰もが一人にならない、居場所と役割の持てる人に育ってほしいと思いを込めて、『（こどもたちが）信頼できる大人との出会い』をテーマとして開催に至りました」と思いを話しました。

▲当日は約80人の参加があり、賑わいました

安心・安全な居場所をつくる

当日は2部制で、第1部は寮さんの講演で、奈良少年刑務所において90分の授業を月3回・6か月間実施する社会性涵養（かんよう）プログラム“物語の教室”（童話と詩）の講師として9年間活動し、関わったこどもたちとのエピソード、大人の役割についての話がありました。

「決して否定せず、受け止めて、安心・安全な居場所を大人がつくる」をキーワードに、「話したことをまずは受け止め、指導や価値観を強要されないこと、自分を否定されるばかりではないことが大切です。そうすることで、こどもたちに変化があり、成長する姿を見ることができました」と語りました。「例えば、こどもから『死にたい』と言われたら、『死にたいぐらい辛いことがあるんだね』と否定せずに受け止め、問い詰めずに待つことで、なぜそう思っているのかの背景を話してくれることにもつながります」といった経験談もあり、学ぶことも多く、あっという間の時間でした。

第2部では、区内でお好み焼き屋を営んでいる黒田良行さん、生野区育ちであり区内で起業した株式会社Re・star（工務店・コンサルティング等）の嶺山俊也さん、一般社団法人よりそいネットおおさか地域生活定着支援センターの前阪千賀子さんの3人を交え、区社協職員が進行のもとパネルディスカッションをおこないました。

「寮さんの話を聞いて感じたことや活動をするうえで大切にしていることは？」という問いかけに、黒田さんは「学校に行けなくても、お店にアルバイトには来てくれる子がいたこともあるので、一つの居場所になることを大事にしています。関わるうえでは、否定しないことを大切にして、あなたがこのお店に必要な存在ということを今後も伝えていきたいと思います」と話しました。

続けて嶺山さんは「小中学生時代は地域のサッカークラブで活動し、思春期には何にイライラしているのかわからない時もありましたが、サッカーが一つの居場所となっていたのではないかと今では思いますし、そこでの経験がいろいろなことに向き合えることにつながっています。今は、従業員にも自身のこどもにも、普段のコミュニケーションを大切にし、話をまずは受け止めることを心がけています」と話しました。

前阪さんは「犯罪加害者への支援をしていますが、受け入れてくれる居場所・環境がないと社会復帰は難しいので、誰もが排除されないまちづくりにつなげていきたいです。フラットな関係でまずは受け止めて関わる大切さを改めて認識しました。間接的に地域の皆さんにお世話になっているかと思いますので、引き続きご協力いただき、支援していきたいです」と、皆さん思いを込めて語られました。

最後は、本イベントのまとめとして寮さんは「目に見える困りごともあれば、目に見えない困りごともある。一人ひとりが、どのように支援をすれば困りごとがなくなるのか、どうすれば困っている方を受け止めてもらえるのか等を考え、歩み寄ることが大切です。そのため、お互いに語り合い、わかち合ってほしいです」とのメッセージを送りました。

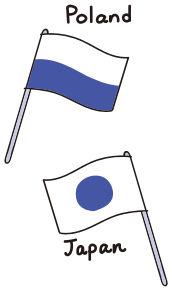
地域生活定着支援センター：都道府県に1つずつ配置されており、高齢者や障がい者で、福祉的な支援を必要とする矯正施設（刑務所、少年刑務所等）矯正施設退所者の社会復帰及び地域生活を支援することを目的としている。

▲パネルディスカッション（舞台上着席者のうち左から区社協・篠﨑さん、黒田さん、嶺山さん、前阪さん）

特別寄稿

シベリア孤児の子孫
～ポーランドから来日～

社会福祉法人大阪市社会福祉協議会 会長　永岡 正己



1920年（大正9年）から1922年（同11年）にかけて、第一次世界大戦とロシア革命後の内戦等によって多くのポーランド人がシベリアで難民となりました。それから100年余が経過したのを機に今回約50人の孤児たちの子孫や関係者の方々が来日されました。

当時、飢餓や病気に苦しむ子どもたちの悲惨な状況に対して、国際救援委員会の要請で日本赤十字社が外務省や関係団体の協力により、敦賀港を経由して日本に受け入れました。第一次は1920～1921年に375人が東京の福田会に、第二次は1922年8～9月に大阪の公民病院看護婦寄宿舎に滞在しました。

大阪では390人の児童と付添者が阿倍野の地に建ったばかりの寄宿舎（現在の大阪公立大学病院の場所）で生活し、短い期間でしたが、カトリック教会や女学校の生徒、医師や看護婦、社会事業関係者、方面委員や地域の人々らが協力し、温かく支援しました。

今回、5月末に東京の社会福祉法人福田会で100周年の記念碑披露式典が開かれ、そのあと敦賀港、京都を経由して6月3～4日に大阪を訪問されました。赤十字社大阪支部会館で当時の足跡を聞き、写真や資料を熱心に見ておられました。そして宿舎跡地に立ち、日曜に通ったカトリック玉造教会（聖マリア大聖堂）、みんな大喜びだった天王寺動物園、歓迎会が開かれた中央公会堂、故国に向けて出港した神戸港など、ゆかりの場所をバスで訪問し、家族の思い出を語り合い、貴重な時間を過ごしました。私も同行させていただき、一人ひとりの長い苦難の物語を思いました。

いのちを守るために果たしたポーランド児童救済事業は、子どもの人権を前進させた歴史であり、平和と福祉のつながりの大切さを示すものです。100年余にわたる日本とポーランドの友好関係の背景を考え、今後も語り継がれることを願っています。

（敦賀市にある人道の港・敦賀ムゼウムには、杉原千畝の「命のビザ」とともに、ポーランド孤児救済の常設展示があります。研究書も刊行されていますので、ぜひご覧ください）

▲聖マリア大聖堂前での記念写真

風をよむ

高齢者に関する定義の再検討

大阪公立大学大学院生活科学研究科 講師　杉山 京

2024年5月23日に開かれた経済財政諮問会議において高齢者の定義を70歳とすることを検討すべきとの提言があった。また同年6月14日には、日本老年学会が「高齢者および高齢社会に関する検討ワーキンググループ報告書」を公表し、2017年の同ワーキンググループの提言を踏襲し、高齢者の定義を現行の「65歳以上」から「75歳以上」とし、65～74歳を「准高齢者」、90歳以上を「超高齢者」と呼称すべきであると改めて提言した。本報告書は、あくまで平均余命が延伸していることを鑑みた医学的見地からの提言であるが、前述の会議の動向を踏まえるならば、定義に留まらず、社会保障制度の構造の見直し等にも波及する大きな変化であると考える。

労働者数がますます減少し、増大する社会保障費を抑制するためには、高齢者の若返りを推進していくことは確かに重要である。しかし高齢者は、老化に伴って確実に心身機能が低下していくため、それらへの対応なしに、一概に定義を議論することはできない。とくに心身状態や生活状況に関する個別性が高い高齢者という存在に対して、定義に合わせて現行制度の対象年齢を引き上げるという議論は危険である。そのため、個別ニーズに応じて必要な医療・介護サービスにアクセスしやすいようにするための自己負担額の軽減措置のほか、経済状況を鑑みた公的年金の給付水準や雇用対策の検討、これらの制度・サービスにつながるための社会的処方の担い手（専門職等）の養成など、高齢者の生活全体を見据えた制度横断を併行して議論し、今後の新しい社会の構築に向けた対策を検討することが求められる。

日本老年学会（2024）「高齢者および高齢社会に関する検討ワーキンググループ報告書」（https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/info/important_info/pdf/20240614_01_01.pdf）

「大阪の社会福祉」は共同募金助成金を活用して発行しています。

令和6年7月発行（毎月1回発行）　発行／社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会　編集・発行人／吉村 浩
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町12-10（大阪市立社会福祉センター内）　Tel.06-6765-5601　Fax.06-6765-5605　https://www.osaka-sishakyo.jp

市社協

大阪市在住の65歳以上の方対象！介護予防ポイント事業

「ちょっとしたお手伝い」の活動でポイントが貯まり、貯まったポイントは換金できます！

令和6年4月から、年間のポイント換金上限額が8,000円から10,000円にアップしました！

大阪市介護予防ポイント事業は、高齢者の外出の機会の増加、生きがいづくりや介護予防を目的に実施しており、研修を受けて登録した65歳以上の方が、介護保険施設や保育所等で活動しています。

自分らしさを活かした活動で、「元気」と一緒にポイントを貯めてみませんか？

▲趣味・特技を活かして活躍中！（外あそびの見守り）

＼活動を始めたい！／

大阪市内在住の65歳以上の方へ

ちょっとしたお手伝いや趣味・特技を活かした活動で活躍しませんか？

まずは、登録時研修をご受講ください。

■登録時研修日程

日　時	場　所
7/11（木） 午後2時～3時30分	福島区社会福祉協議会（福島区海老江6-2-22）
7/18（木） 午後2時～3時30分	東淀川区社会福祉協議会（東淀川区菅原4-4-37）
7/22（月） 午後2時～3時30分	西成区社会福祉協議会（西成区岸里1-5-20 西成区合同庁舎8階）
7/24（水） 午後2時～3時30分	東住吉区社会福祉協議会（東住吉区田辺2-10-18）

※以降の日程でも開催を予定しています。詳しくはお問合せください。

＼活動者を受入れたい！／

介護保険施設や保育所・認定こども園の方へ

本来のサービスを手厚く提供できたり、活動者が架け橋となって地域とのつながりができたり、施設側のメリットも数多くあります。

ぜひ、受入施設としてご登録ください。

<介護保険施設での活動例>

お話相手、配膳の手伝い、食器洗い、楽器の演奏、レクリエーションのお手伝い、お掃除、洗濯物たたみ　など

<保育所・認定こども園（幼保連携型・保育所型）での活動例>

絵本の読み聞かせ、遊び相手、配膳の手伝い、食器洗い、園庭の手入れ、登降園時の見守り　など

問合せ・申込み

大阪市社会福祉協議会　福祉事業課
介護予防ポイント事業担当
☎06-6765-5610
✉kypoint@osaka-sishakyo.jp
https://www.osaka-sishakyo.jp/kaigoyobou/

令和6年度 赤い羽根共同募金記念バッジデザインは「"思いを繋ぐ"募金活動の広がりと繋がりを願って…」に決定

10月1日から全国で実施する第78回赤い羽根共同募金運動で使用される記念バッジのデザインが決定しました。近畿6府県（滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県）共同募金会が合同で募集。193点の応募作品の中から、選考委員会の審査の結果、赤い羽根賞（最優秀賞：採用作品）1点、愛ちゃん賞（優秀賞）5点、希望くん賞（奨励賞）20点を決定いたしました。

採用されたデザインによって製作した記念バッジは、今年度の共同募金運動期間中に、共同募金に協力いただいた方へのお礼や、共同募金をPRするためなどに、近畿6府県を中心に広く活用されます。

赤い羽根賞（最優秀賞：採用作品）

※バッジの直径は17㎜程度

〈作者〉伊藤瑠花（いとうるか）さん（滋賀県・大学生）

〈制作意図〉募金活動やその思いが人から人（募金する人、寄付を受ける人など）につながり、活動がより広がる様子を表現しました。赤い羽根を優しく包み込む手で、活動に関わる全ての人の温かい気持ちを表しました。

愛ちゃん賞（優秀賞）・希望くん賞（奨励賞）

受賞者・受賞作品については、大阪府共同募金会のホームページに掲載いたします。

●ホームページ【赤い羽根おおさか】
http://www.akaihane-osaka.or.jp/

お問合せ先

社会福祉法人大阪府共同募金会　担当：熊谷、内藤
〒542-0065 大阪市中央区中寺1-1-54
大阪社会福祉指導センター2階
☎06-6762-8717　FAX 06-6762-8718
✉ai-kibou@akaihane-osaka.or.jp

立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上
三井住友海上の安心
GK
クルマの保険　すまいの保険　ケガの保険
www.ms-ins.com